

## 曲想と音楽の構造・歌詞との関わりに関する考察

小林 夏海 教職基盤形成コース 教科授業力高度化プログラム

キーワード：中学校音楽科，歌詞，知覚，感受，関わり

### 1. 問題の所在，目的

平成 29 年に告示された中学校学習指導要領第 2 章第 5 節音楽では，歌唱の活動を通して，曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて生徒が理解できるように指導することが求められている。しかし筆者の経験では，「詩を音読して感じたことを生かして歌おう」と詩の朗読のみを行ったり，難しい言葉の意味を調べたりする，といったものがほとんどであった。詩そのものの雰囲気味わうために朗読は有用であるといえるが，これだけでは詩の追究のみで終わってしまい，音楽と関わらせることができていない。

先行研究として「詩のボクシング」という朗読活動を合唱曲の歌詞で行った日吉(2008)の研究<sup>i</sup>が挙げられるが，この研究では，音楽と歌詞との関わりを考えると朗読活動との繋がりとは検証されていない。歌曲における言語芸術と音楽芸術との関わりを分析した草野・中島(2020)の研究<sup>ii</sup>の理念は筆者の考えに近いが，この研究では実際の授業実践は行われておらず，具体的な授業の創出に繋げていくことが今後の課題とされている。

文献調査や自身の経験を踏まえ，音楽と歌詞との関わりについて考えさせるためには，歌詞を“詩”の状態味わった上で，音楽の構造との“関わり”について客観的に捉え，それを感受とともに言語化していくことが必要なのではないかと筆者は考えた。

本研究の目的は，音楽科の授業において，生徒が音楽の構造と歌詞との関わり，及びそれらから感じられる曲想との関わりについて，言語化することで明確に捉えることのできる授業・手立てとはどのようなものか，授業実践を通して明らかにすることである。

### 2. 研究方法

長野県内の S 中学校 3 年 D 組(2023 年 1 月現在)において，歌詞を扱う授業を行った。

研究の流れを以下に示した。

①詩の精査・解釈<sup>1</sup>とはどのようなものか明らかにする。また，作曲者によって詩の解釈の違いがあることを生徒に理解させる授業について検討し，実践を通して考察する。

②音楽の構造と歌詞との関わり，及びそれらから感じられる曲想との関わりについて，言語化することで明確に捉えることのできる授業・手立てについて検討し，実践する。

<sup>1</sup> 中学校学習指導要領解説 国語編の p.37 で，『「精査・解釈」とは，文章の内容や形式に着目して読み，目的に応じて意味付けたり考えたりすることである』とされている。本研究ではこのように詩を鑑賞させたいと考え，「詩の精査・解釈」と表記している。また，「詩」と表記する際は縦書きかつ漢字変換もある状態を指し，「歌詞」と表記する際は楽譜の中で旋律と共にひらがな等がかかっている状態を指している。

③実践での生徒の姿やワークシートを分析し、②で実践した授業について考察する。ワークシート分析は、研究目的に照らして項目をつくり、全員分の記述を評価して分析する。

### 3. 実践研究の概要と考察

#### 3.1-1 『野ばら』を用いた国語科の授業(2021 年 10 月)

『野ばら』の実践は、国語科で 1 時間、音楽科で 1 時間の全 2 時間構成とした。なお国語科の授業については、S 中学校の国語科教員に協力を依頼し、授業を行っていただいた。

国語科でも授業を行ったのは、研究を進めるにあたって、国語科で歌曲に使われている詩を扱った授業を行うとどのようなものになるのか、明らかにしておくべきだと考えたからである。また、生徒が音楽の構造と詩との関わりについて考えるためには、作曲者によって詩の捉え方が違い、それにより異なる曲ができることを理解している必要があると考え、教材として、同じ詩に対して 111 曲も作曲されているゲーテの『野ばら』を選んだ。

国語科では、ゲーテ作詞『Heidenröslein (野ばら)』の日本語訳を読んだのち、リフレインを省略した教師による改作版とオリジナルとを比較することで、本作の表現の効果について精査・解釈をした。生徒たちは、少年とバラとの関係について意見を出し合い、詩の捉え方が多様であることを実感した様子であった。また、本来版にみられるリフレインについて、「リフレインは連ごとに意味合いが変わる」「リフレインの意味はどの連でも同じだが、間をつくる役割がある」と 2 つの視点から議論し、詩に対する理解を深めていった。

#### 3.1-2 『野ばら』を用いた音楽科の授業(2021 年 10 月)

##### (1) 概要

国語科の授業から 1 週間後、筆者が行った音楽科の授業では、同じ詩『野ばら』を用いてシューベルトとフッテラーが作曲した 2 つの歌曲を聴き比べた。

##### (2) 成果

『野ばら』の詩をリフレインに着目して精査・解釈したことによって、生徒は歌詞と音楽との関わりについて考えることができた。国語科の授業を踏まえ、生徒は、作曲家はリフレインをどのような音楽で表現したのだろう、という視点で楽曲を鑑賞した。これにより、「シューベルト：同じ様なメロディーがくりかえされている」「フッテラー：歌に合った音の下がり方をしている」などと、楽曲の特徴を捉えて記述することができていた。生徒の中には、「シューベルトは同じテンポで、フッテラーはだんだん変化していくリフレインなので、シューベルトは何も感じていない少年目線、フッテラーはつらいと感じるバラ目線の心情変化を表すリフレインだと思う(一部筆者要約)」と記述する姿もみられ、筆者はこれを、詩から感じたことと音楽とを関わらせて考える姿であると捉えた。

また、詩の解釈の多様さ、解釈した詩の表現方法の多様さに気づくことができた。「作曲者によってイメージが変わることが分かった。伴奏や音の高低によって明るい曲にも暗い曲にもなるのが面白いと思った(一部筆者要約)」といったふり返りが多々見受けられた。

##### (3) 課題

音楽の構造について整理する支援が不足していた。授業後半、楽曲の音楽の特徴を整理する場面で、音楽を形づくっている要素についての記述がほとんどなかったり、「2 連目→言い合いの部分が強め」「3 連目→2 連の後の結果という感じ」と知覚と感受が混在した記述が見られたりした。“音楽のどのような部分からそう感じたか”ということをも具体的に書けないと、歌詞と音楽との関わりについて述べることはできないのではないかと感じた。

### 3.2 『翼をください』を用いた授業(2022 年 9 月)

#### (1) 概要

全 2 時間の授業とした。まずは教師による詩の朗読を聴き、詩の精査・解釈をした。次に楽曲を一度歌い、音楽の特徴と歌詞との関わり、及びそれらから感じられる曲想について整理した。授業の最後には、授業内で共有された友の意見やこれまでの活動を振り返り、本楽曲にふさわしい表現についてワークシートに記入する活動を行った。

#### (2) 成果

生徒は、音楽の構造と歌詞との関わり、及びそれらから感じられる曲想について適切に整理して言語化することができた。『野ばら』の実践での反省を踏まえ、第 1 時で記入するワークシートに「①：音楽の特徴」「②：①と詩との関わり」「③：①②から感じられる曲の雰囲気や浮かんできた情景」と書き込む表を作り、生徒が、音楽と歌詞との関わり、それらと曲想との関わりについて言語化できることを狙った。また、曲全体について書かせるのではなく、楽曲を ABC の 3 つの場面にわけて記入することで記述しやすくした。

生徒全員分のワークシートを本研究の目的に照らして分析を試みたところ、多くの生徒が音楽の特徴と歌詞との関わり、それらから感じた曲想について整理することができた。特に「①：音楽の特徴」は、8 割強の生徒が、空欄なく、適切に音楽の特徴をまとめることができていた。また第 2 時では、第 1 時に比べて明らかに記述量が増えた生徒が 37 人中 20 人、新たな音楽の特徴に気づいた生徒が 17 人いた。これは、第 1 時の時点では気づいている人が少なかったデクレッシェンドについて取り上げたり、1 つの音楽の要素から様々な感受をしている複数人の意見を共有したりした工夫が活きたのではないだろうか。

授業の最後、ある生徒は「C は、A～B にかけて盛り上がってきた思いが溢れて表現されるパートだと思うので、解放的に、思いっきり歌うことが大事だと思う。でも、C の最後は、不安だったり、現実を見て少し気持ちがおさまったりするところなので、“翼はためかせ”と“ゆきたい”で強弱の差をはっきりとつけてデクレッシェンドになるように歌いたい(一部筆者要約)」と記入しており、音楽の構造と歌詞、それらから感じられる曲想に関わらせて、自分がどのように歌って表現したいか、具体的に記述する姿が見られた。

#### (3) 課題

リズム、和音など音楽を形づくっている要素について、言葉で表現することが難しい様子が見られた。強弱、旋律などについては正しく書けている生徒が多い一方で、「リズムがゆっくりしている」「リズムが、気持ちがたかぶるかんじ」といったように、知覚したリズムを表す言葉として適していない言葉で説明する姿が多く見られた。詩と音楽との関わり

について述べるには、音楽を形づくっている要素を適切に言語化できていなければならない。特にリズムについて、言語化するための支援を考えていく必要があると感じた。

#### 4. 総合考察

本研究での授業実践を通して、以下のような生徒の姿が見られた。

- ①詩の精査・解釈には個人差があり、それにより、作曲者の異なる受け取りから異なる曲ができることを理解した。
- ②「音楽の構造」「音楽の構造と歌詞との関わり」「音楽と歌詞との関わりから感じられる曲想」について言語化した。その際、ワークシートがある程度有効にはたらいした。
- ③共有を通して作品への理解を深めると共に、学習者の感じ方が異なることを理解した。

①の場面で、詩も音楽も受け取る人それぞれの解釈が生まれるということを念頭に置いているからこそ、生徒は作曲家の意図を想像し、音楽の構造を具体的に言語化して楽曲の特徴を捉え、歌詞と音楽との関わりについて自らの言葉で語る事ができた。②の言語化する場面ではいきなり記述させるのではなく、まずは知覚できることを順に書き出し、それを根拠に感受したことを語ることで、生徒は曲想と音楽の構造・歌詞との関わりについて捉えることができた。③の場面で生徒間の感じ方の多様性に触れることで、生徒は詩を活かしてより具体的で豊かな表現で歌おうとするだろう。『翼をください』の第2時では、同じ音楽の要素から感じた多様な感受が共有されたことによって、自分はこう感じたからこんな風に表現を工夫したい、と自分の言葉で思いや意図を記述することができた。

ただ、詩の精査・解釈をしっかりと行くと、詩と音楽との関わりについて考えやすくなる一方で、詩の読み取りに集中して音楽にあまり意識が向かない生徒もいた。例えば、『翼をください』に対して「人生の諦めをあらわしている」と詩に寄った考察をしている姿がみられたが、このような生徒は『翼をください』の音楽そのものが持つ明るさや解放感に意識が向いていないと考えられる。対して、音楽から感じられたことを中心に記述している生徒もいたので、両方の意見を授業内で共有することによって、詩と音楽との“関わり”に意識が向くのではないだろうか。このような、詩と音楽とを扱うバランスやそれを実現するための授業構成・共有方法に関しては、今後も実践の中で追究を続けていきたい。

#### 文 献

<sup>i</sup> 日吉武(2008),『音楽科教育における合唱指導の一試案 ―「詩のボクシング」を取り入れた歌詞指導―』, 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編 60 巻 15 ページ

<sup>ii</sup> 草野美音・中島卓郎(2020),『歌曲における言語芸術と音楽芸術のかかわりに関する考察 ―J.W.Goethe “Heidenröslein”の分析を通して―』, 信州大学教育学部研究論集 第 14 号 pp.114-132

・文部科学省(2018), 中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 音楽編

・文部科学省(2018), 中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 国語編 p.37